神聖かまってちゃんと劇場版エウレカセブン

借りもののサブカルチャーが本物のサブカルチャーになるとき

本文抜
《「なぜ、あの二人のように自分たちで物語を作ろうとしなかったの？」／構造としてのアニメにNOをつきつけた。／サブカルチャーそのものは何も語ってない／の子がサブカルチャーの引用を辞め始めたことを意味する。事実、》

語って欲しいバンドを語ってくれない音楽雑誌やライターに我々、は反旗をひるがえそう！
これは、神聖かまってちゃん評である。そ、ニートの。。。
音楽の文脈を知っている音楽ライターが書かないから、
20代のks底辺が違った角度から「神聖かまってちゃん」評を紹介します。
今回は、劇場版エウレカセブンを軸に、神聖かまってちゃんについて語っていきます。

「やっぱりね、誰かがやらなくちゃいけないんですよ。公開後の評価は「賛賛否否否否否」かもしれないですけど」

(京田知己『コンティニューvol.45』2009)

アニメについて検索すると、DVD / BDの売上げ枚数がひんぱんに話題になっている。どうやら最近は、売り上げが高い作品が面白く、低い作品は面白くないという風潮になっているのだ。

売り上げ枚数がそのアニメの評価とみるなら、「アニメ？それはメジャーじゃないから」と一蹴・バカしてきた者たちと同じではないか。ドラマや映画には市場で負けてしまうけど、アニメはそれに負けない表現なんだ！というカウンター志向を持っているのがアニメオタクだ。

だから、当時世間への浸透力が低かった『宇宙戦艦ヤマト』や『機動戦士ガンダム』、『新世紀エヴァンゲリオン』が放送から時間を置いて大ヒットした。

カウンター志向が作り手にも受け手のアニメファンにもあるからこそ、一般の人たちも観て刺激を受ける一級作品が生まれるのではないか

『交響詩篇エウレカセブン』は2005年から1年間に渡り、ＭＢＳ・ＴＢＳ系で放送されたテレビアニメだ。↓

『交響詩篇エウレカセブン』は2005年から1年間に渡り、ＭＢＳ・ＴＢＳ系で放送されたテレビアニメだ。

監督に『ラーゼフォン　多元変奏曲』で監督した京田知己。シリーズ構成は『カウボーイビバップ』の佐藤大、キャラクターデザインは『ＯＶＥＲＭＡＮキングゲイナー』の吉田健一。1969～1970年生まれの同世代の3人組、しかも、それぞれのポジションを担当するのは初。という大胆なキャスティング。↓

内容をざっと紹介しておこう。辺境の街に住む14歳の少年レントンにとって、世の中は「最悪」で満ちていた。ある日、大型ロボットと共に同い年くらいの少女が家に落ちてくる。彼女がいる団体「ゲッコーステイト」にレントンも入ることになり、世界の戦いに巻き込まれていく。

この作品の特徴は、少年少女をとりまくロボット戦闘ものという要素以外に、テクノミュージックに代表される音楽からの引用、あるいはサーフカルチャーなどが取り入れられているところだ。

そのオシャレな要素もあいまって作品はロボットアニメ好き以外の層にも熱狂的なファンを生んだ。

その後、2009年に劇場アニメ映画として新作『交響詩篇エウレカセブン ポケットが虹でいっぱい』が公開される。これが問題作として話題になった。↓

その後、2009年に劇場アニメ映画として新作『交響詩篇エウレカセブン ポケットが虹でいっぱい』が公開される。

これが問題作として話題になった。↓

ファンが熱狂的であればあるほどその作品に関する評価の当たりも厳しくなるものだ。劇場版はテレビシリーズと同じタイトルを関しているだけに、ファンは『エウレカセブン』の世界観を観にいっていた。

しかし、劇場版はキャラクターの外見と名前こそテレビシリーズと同じものの、性格や血縁関係や世界設定なども変更されていたのだ。人気のあったキャラクターが無残に死んでしまったり、不幸とも思える結末になっているキャラクターもいるという。

アニメファンが劇場版アニメで望むことは、前作で消化不良だった話を解決し、不幸になったキャラクターが幸福になった姿が見たいというものである。『エウレカセブン　ポケットが虹でいっぱい』はそれをアニメファンに提供しなかった。

それゆえ公開当初からインターネットの書き込みを見ているとファンは混乱していた。というか、とても不評だった。ためしに、大手通販サイト「アマゾン」のレビューを見てみると評価が思わしくない。低い評価を入れている人は劇場版の変更点が受け入れられないという内容の書き込みが多く目立つ。↓

大手通販サイト「アマゾン」のレビューを見てみると評価 が思わしくない。低い評価を入れている人はテレビシリーズの変更点が受け入れられないという内容の書き込みが多く目立つ。

わたしは劇場版を観るさい、それだけの前情報は頭に入れていた。「どうやら、今回の劇場版はやばいらしい。それも悪い意味でやばい」ということだった。
興味のある作品だったので、ビビりながら観た。

驚いた。
これが最高の映画だった。
↓

最高の映画だった。

科学者の勝手な実験によって常人の三倍のスピードで老化する身体になってしまったゲッコーステイト乗組員とホランド。
彼らはその呪われた運命を変えるため、「ネバーランド」という理想郷の世界へ行こうとしていた。先人たちが残した書物「アゲハ神話」の物語通りにすればその世界に行けると言われており、ホランドたちはその物語を実行するため行動していた。

終盤、エウレカとレントンは自分たちの選択で↓

終盤、エウレカとレントンは自分たちの選択でその物語（アゲハ神話）を捨てて、ゲッコーステイトから飛び立っていく。怒りに震えるホランドにアゲハ神話の語り部は「なぜ、あの二人のように自分たちで物語を作ろうとしなかったの？」と言う。

先人によって負荷を背負わされたホランドは、先人の見つけた方法を使って自分の未来を獲得しようとした。エウレカとレントンは自分たちのやり方で未来を掴もうとした。元ある物語をなぞるのではなく、物語は自分たちで作るべき、ということをこの映画は教えてくれる。

劇場版エウレカセブンは、視聴者を卒業させない構造としてのアニメにNOをつきつけた。↓

元ある物語をなぞるのではなく、物語は自分たちで作るべき、ということをこの映画は教えてくれる。

　劇場版エウレカセブンは、視聴者を卒業させない構造としてのアニメにNOをつきつけた。浸るのではなく外に出る活力となる作品を作った。しかし、前作品の視聴者はアニメに浸りにきていた。批判が来るのは当然である。
　劇場版で監督・脚本を務めた京田知己はこう語っている。
　「結局、テレビシリーズってすべてにおいて引用であり、周辺をうろついている作品だったんですよ。「サブカルチャーに対する憧れ」っていうような、そんな作品だった気がしてて。言ってしまえば後追いのサブカルチャーだった。それに関しては自分も含めて決意が足りなかったし、その結果、サブカルチャーそのものは何も語ってないものになったんですね。」

　借り物のサブカルチャーに浸るのではなく、受け手に一歩足を進ませるサブカルチャーそのものになることを京田知己は行おうとした。↓

借り物のサブカルチャーに浸るのではなく、受け手に一歩足を進ませるサブカルチャーそのものになることを京田知己は行おうとした。
それまでの自身のテレビシリーズにある物語のバックボーンを利用し、それを裏切ることで、「いまある物語に浸る」のではなく自分たちで新しい物語を作っていくべきなんだということを表現した。

劇中では、テレビシリーズの物語世界「ネバーランド」を望むホランドと、どういう結果になろうと自分たちで物語を作ることを選ぶエウレカとレントンに象徴されている。

ロックンロールもそうである。↓

　ロックンロールもそうである。新しい物語を作る姿勢（アティチュード）こそロックンロールだ。例えば、エレキギターバンド大会で独りフォークギターをしょっていればその人物こそロックであるし、革ジャンを着てマーチンブーツの集団のなかにパジャマで瞬足を履いていればその人物こそロックなファッションだ。
　ロックンロールは浸らない姿勢だ。

神聖かまってちゃんは事件性やの子の持つ刺激的な言語（『夕方のピアノ』に代表される「死ね！」）とノイズなギターの一↓

ロックンロールは浸らない姿勢だ。

神聖かまってちゃんは事件性やの子の持つ刺激的な言語（『夕方のピアノ』に代表される「死ね！」）とノイズなギターの一方で神秘的なサウンドを出す。
熱狂的なファンを生み出したと同時に、「お前らをぜったいに許さない！」という人たちも多く生み出した。
従来のロックが好き、ロックバンドが好きという者たちが神聖かまってちゃんに敵意を出していた。

劇場版の『エウレカセブン』と重なるところがあった。↓

劇場版の『エウレカセブン』と重なるところがあった。ネット配信を行っているとき、の子の格好にいろいろなネタが仕込まれていたからだ。リアム・ギャラガーのサングラスと首かけタンバリン、カート・コヴァーンの服、忌野清志郎のヘルメットを身につけていた。それらはまさにテレビリシリーズの『エウレカセブン』と同じく、サブカルチャーの引用・後追いのサブカルチャーを思い出させる。

それもあってか、音楽ライターや雑誌は最初こそ大きく取り上げたこともあったが、それ以降は「インターネット発のバンド」という定型文な紹介の仕方しかしてもらっていない。
それは、劇場版『エウレカセブン』と同じく、の子がサブカルチャーの引用を辞め始めたことを意味する。↓

　それは、劇場版『エウレカセブン』と同じく、の子がサブカルチャーの引用を辞め始めたことを意味する。事実、の子の服装は気をてらったものではなく私服になった。バンドが有名になる以前の曲を収録したアルバム『つまんね』『みんな死ね』以降になると、神聖かまってちゃんの曲は現在のの子の実像に近くなった。過去あるものの引用を辞めて、今の自分の自我を詰めこんで新しい物語を作ることに決めたのだ。借りもののサブカルチャーからサブカルチャーそのものになることを決めた。本当の意味でロックンロールの意志を継いだのである。（逆に、『世界の終わり』が気をてらった服装になって、シングル曲で自我を消すことによって動員を上げている点が興味深いが）
　なので、ライターや雑誌からスルーされている。

それは、言語や引用を圧倒的に超える音楽を神聖かまってちゃんが鳴らしているからだ。↓

それは、言語や引用を圧倒的に超える音楽を神聖かまってちゃんが鳴らしているからだ。

例えば、イースタンユース、サンボマスター、銀杏BOYZも言語を超えている。彼らについて言葉を尽くせば尽くすほど本質から離れていく気がしてしまう。かつて、甲本ヒロトは「日本語に訳せない言葉がある。それはロックンロール」と発言していた。ロックンロールは説明できないものなのだ。いくらバンドを解析してもそれが陳腐だなあと思えてしまうバンドこそロックンロールバンドなのだ。

だから、神聖かまってちゃんこの時代の希少なロックンロールバンドだ。←

うおお

神聖かまってちゃんと劇場版エウレカセブン

http://p.booklog.jp/book/83205

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ